

中学向け授業案：わたしにとって大切なもの

言語学習目的：

- 大切なこと／ものを表現する。
 - 気持ちを表現する
 - インタビューするときの表現を知る。
- 文型・表現：**～にとって、～そうです、～と思っています、(大切なものは)～ことです、(できれば、)～たいです

言語以外の学習目的：

- 自分たちの日常にある「音楽」の存在について、振り返る。

- 自分にとって大切なものについて表現することで、改めてそれに気づいたり強く意識したりする。
- クラスメートの大切なものを知ることによって、お互いのことをより知る。

使用時間：50分

用意するもの：『今日日本』、ワークシート(付録)、資料(付録)

『日語』で関連のある課：義務教育『日語』(人民教育出版社)9年級下冊第6課(忘れられないことば)

□ 事前準備

授業の1週間前に、「今日日本」1～3を張る。この時、グループC(今日日本4)は隠しておく。ワークシートを1人1枚配付し、授業までに空欄を埋めてくるよう指示する。

□ 授業の進め方

1. 導入

- (1) ワークシートの1の答え合わせを通じて、沖縄県伊是名島の地理や歴史を確認する。
- (2) Cグループの発表(「今日日本」4)の内容を、質問を通して導入する。

発話例

- みなさんは日本の音楽を聴いたことがありますか。それは、どんな音楽ですか。
- 沖縄の音楽を聴いたことがありますか。
- (3) 映像を見せなくて、尚門太鼓の演奏を聴かせる。

発話例

- どんな楽器だと思えますか。

ヒント

http://www.tjf.or.jp/deai/contents/chart/ts_movie.html に演奏と映像がある。

- (4) 映像を見ながらもう一度尚門太鼓の演奏を聴かせる。

発話例

- 中国にも(みなさんの地域にも)似ている楽器がありますか。

2. 読解活動

- (1) ワークシートの2の答えを確認する。

答案

すみこさん：B, G ゆうたろうくん：D, I 俊一さん：A, C テールさん：F, H

ヒント

TJFのホームページにグループCの発表が掲載されているので、イメージを膨らませるために見せてもいい。ただし、ホームページには中文が併記されているので、見せないように注意する。

- (2) 伊是名尚門太鼓のメンバーが音楽をどう思っているのかを生徒に次の質問をして、発言を板書しながらまとめる。

発話例

- ①メンバーにとって太鼓はどんな存在だと思えますか。

- ②太鼓をやっているとき、どんな気持ちでしょうか

ヒント

文章に書いてあることだけでなく、想像したこともたくさん言わせて、語彙を提示する。①の表現例：大切です/必要です/生きがいです/自分を表現することができます。②の表現例：楽しいです/おもしろいです/充実しています/落ち着きます/わくわくします。

3. インタビュー活動

- (1) 教師は、尚門太鼓メンバーにとっての太鼓のような存在が自分にもあるかどうか聞く。

発話例

- 尚門太鼓のメンバーにとって太鼓はとても大切なものです。みなさんも大切なものがありますか。考えてみましょう。
- (2) 下のインタビューシートを板書し、生徒にノートに写すよう指示する。「自分にとって大切なもの」について3～4人にインタビューし、ノートに書き留めておくよう指示する。

発話例

- ①あなたにとって大切なものは何ですか。
- ②それはなぜですか。
- ③それをしているときはどんな気持ちですか。

【インタビューシート】

名前	大切なもの	理由	気持ち
(例) 綾子さん	日記	自分の気持ちを表現できるからです。	落ち着きます。

4. まとめ

インタビューしたことをクラスで発表する。この時、クラスのレベルによっては、次のモデル文を提示してもいい。

★～さんにとって大切なものは_____です。なぜなら、～からだそうです。_____をやっているときは_____そうです。

ヒント

口頭での発表という形ではなく、文章に書いてそれを回して読みあう形でもいい。

拡張練習①

発表したことを文章にまとめ、クラスで1冊の本にする。具体的に大切なものがわかるようなもの(例えば写真)といっしょにまとめてもいい。

拡張練習②

グループに分かれて、家族や身の周り人、学校内の大人にインタビューをする。

高校向け授業案：自分たちのごみを見直そう

言語学習目的：

- グラフや表を説明する
- 自分の意見を言う
- 日常生活で使う物の名称を知る

文型・表現：いちばん多かったのは／少なかったのは～です、～と思います／ました、～と～思っていました、(～より)～のほうが(いい)、～たほうがいいと思いますなど

語彙：プラスチック、空き缶、ビニール袋、生ごみなど

言語以外の学習目的：

- 日常にある「ごみ」を振り返り、「ごみ」問題を自分たちの問題として意識化し、環境や資源など世界的な問題と関連させて考える。
- グループでの協働作業を通して、お互いに学習を促進する。

使用時間：50分×4～5コマ

用意するもの：『今日日本』、日本の自治体のごみ分類の資料(付録)、ワークシート(付録)、教室のごみ、リサイクル製品など

『日語』で関連のある課：義務教育『日語』(人民教育出版社)8年級下册第1課、高校『日語』第2冊第2課(ごみ問題—わたしたちにできること)

□ 事前準備

授業の1週間前に、「今日日本」1～3を張る。この時、グループC(今日日本4)は隠しておく。ワークシートを1人1枚配付し、授業までに空欄を埋めてくるよう指示する。

□ 授業の進め方

1. 導入

(1) ワークシートに書き込んだことを確認する。

発話例

生徒

- みんなでごみを拾いました。伊是名はきれいですがよく見るとごみがたくさん落ちていたからです。
- 1時間で7袋拾いました。わたしは伊是名のごみは少ないと思いました。

(2) 次の質問をして、自分たちのごみについても考えさせる。中国語で答えてもいい。

発話例

- ロージーとポールが自分の町のごみの処理について話しました。ロージーの国では、どのようなことをしていますか。
- ポールの国では何をしていますか。
- では、もしみなさんがグループBのメンバーだったら、自分の地域ではごみをどのようにゴミを処理していると答えますか。

ヒント

できるだけ知っていることをたくさんあげるようにしてください。活動の前の頭の活性化になるようにしましょう。

2. ごみの分別について考える

(1) 『今日日本』の写真を見ながら、メンバーがどんなふうに分別したか、燃えるごみ、燃えないごみがどんなものかを考える。

発話例

- 伊是名で使ったごみ袋の写真です。「もえるごみ」「もえないごみ」「資源ごみ」と書いてあります。それぞれの袋の中になんかごみを入れると思いますか。

ヒント

資源ごみはリサイクルするものであることから、最近は、資源物と表現する自治体が増えています。

(2) 実際の自治体のごみの分け方のパンフレットをみながら、自分たちが考えた分類について確認する。

(3) 「資源ごみ」がリサイクルされるのかを考える。生徒に知っていることをどんどん言わせてもいいし、リサイクルしてできた製品から元の製品をあてるクイズにしてもいい。

(例) ペットボトル → ペットボトル、服、プラスチックファイル
新聞 → ノート、トイレトペーパーなど
発泡スチロール → 文房具などプラスチック製品

(4) 自分たちの町では、ごみをどう処理をしているのか、問題になっていることなどを話す。

ヒント

・これまで話したごみの処理の仕方のポイントをヒントにして、自分の町のごみの処理の仕方を考える。
・ごみの処理システムがまだ確立していない地域もあるかもしれません。その場合は、自分たちが出しているごみがどう捨て方をされ、その後どうなっているのかを見つめなおすといいでしょう。

3. 調査

(1) ワークシートを1人に1枚配付する。自分の家でごみをどれくらい出しているのか、1週間、量と種類を調べてくる。また、気がついたことを自由に書くよう指示する。

ヒント

ビニール袋の数やバケツの数、また缶や瓶のような数えられるごみならば個数を調べさせてもいいでしょう。ここでは、自分たちがどのようなごみをどれくらい出しているかを意識化させるのがねらいです。

【2コマ目】

4. 発表

(1) 1週間後、結果をグループでまとめてクラスの前で日本語で発表する。

ヒント

表を使う、グラフを使うなど発表に工夫をさせましょう。また、クラス全体のごみの量を計算してみるなど、調査結果を次の討論の話し合いの材料にしましょう。

(2) ほかのグループの発表を聞いて、気づいたことや感想などを言わせる。日本語でも中国語でもいい。

【3コマ目】

5. 討論

(1) グループに分かれて、自分たちのごみを減らすことができないかどうかを考えさせる。

(2) (1) で出たいろいろな考えを3Rに分類してみるよう指示する。分類してみ、アイデアが少ないRはもう少し考えるよう言う。

(例) ペットボトルではなく水筒にお茶か水を入れて持ち歩く→削減
小さくなった洋服を近所の小さい子にあげる→再利用
古紙を廃品回収に出す→リサイクル

ヒント

話し合いをする前に3Rの確認をするが、3Rは、3の調査(考察)、4のまとめ発表から生徒自身に気が付かせるといい。もし生徒自身から気づきが出てこない場合、教師が生徒たちの意見から導き出す。

(3) グループで出たアイデアを「すぐにできること」や「効果が大いこと」など命題をたてて、ランキングさせる。まず個人でランキングをして、そのあとグループでランキングをする。

ヒント

付録で紹介しているランキング表を使うとやりやすいです。グループで出た9つのアイデアを選択肢にして優先順位をつけます。その過程で、意見の交換や考えの整理や問題を深めることができます。

6. 実践することを決める

教法指針

今回の高校向け授業案で紹介している教室活動は、一種のプロジェクトワークと言える活動です。プロジェクトワークは、あるテーマが設定され、そのテーマを実現するために学習者がグループを組んで自主的に計画を立て、グループ内で各人の分担を決め、情報収集や調査活動・結果分析を行い、最終的に発表などの形で成果をまとめるという学習活動です。その大きな特徴として2点が挙げられます。まず一つ目は、必要に応じて教室外に出かけて調査活動を行うなど、活動が教室内に限定されず、より実社会に近づいた活動であるということです。それから二つ目は、プロジェクトを実施する過程で行われる言語学習が4技能すべてにわたる総合的言語学習になっていることです。つまり、関連資料を読んだり、教室外で日本人に対して聞き取り調査を行ったり、報告書にまとめたりする過程で、日本語を使用することによって、より実践的なコミュニケーション能力を身につけることができるのです。したがって、一つのプロジェクトを行うにあたっては、一定の時間が必要とされ、4～5コマにわたって行われることもよくあります。

今回の高校授業案に沿って言えば、日常の「ごみ」について考えることを通して環境問題に対する意識を高めるという最終目標に向けて、まずは、「今日日本」を題材にした動機付けに始まり、自治体の資料による調査・情報の収集、さらに、実際の生活の中での「ごみ」について調べるという教室外活動を通して意識を高めたうえで、自分たちで考えることを考え、さらに、それを実践に移して、最終的な報告へとつなげるという、よく考えられた流れだと思います。学習者自身が主体的に計画を立案してプロジェクトを実施するという本来の形ではありませんが、ある程度教師がコントロールできるという点では、むしろ授業が組み立てやすいのではないのでしょうか。また、実物を使って「燃えるごみ」と「燃えないごみ」の分別をさせたり、リサイクルされた製品から元の製品を当てるクイズや、すぐにできることのランキング表作りを行うなど、学習者を飽きさせない工夫が随所に盛り込まれているのも長いスパンで行う活動に

実行することを各自選択する。クラスで実践する期間を決めて、各自実践する。

【4 コマ目】

7. 実践結果をまとめる

実践した結果をまとめる。実践した結果だけでなく、実践してみて自分はどう考えたか、周りの人たちはどうだったか、実践が出来なかった場合それはなぜか、などもまとめる。各自まとめたあとは、グループで話し合い、グループごとにまとめる。まとめ方も各グループで工夫する。視覚的にも訴えるような方法を考えるよう促す。

【5 コマ目】

8. 報告

グループごとに発表する。発表の際、大きな紙にまとめたものを張ってもいいし、実物をもってきてもいい。

執筆：中新井綾子

2001～2003年、国際交流基金青年日本語教師として吉林省教育学院に赴任。

は必須のことと言えます。

私は、実際に授業で、「燃えるごみ」と「燃えないごみ」「リサイクル品」の分別をクイズ形式で学習者にさせたことがありますが、ふだん何気なく使って捨てているものの中で、意外なもの「燃えるごみ」や「燃えないごみ」、あるいは「リサイクル品」になるのを知って驚く学習者の姿が非常に印象的でした(例えば、ビデオテープが「燃えるごみ」に分別されること*など)。こうして高まったモチベーションによって、その後の活動が大変やりやすくなったことは言うまでもありません。

中学授業案も、「今日日本」の読みから始まり、音楽を例にした自分の気持ちの表現から、自分にとって大切なものの発表・まとめへと導いていくというプロジェクト的な流れですが、外国語で自分の気持ちを表現するのは思ったよりも難しいことなので、レベルによってはある程度中国語での表現を許し、それを教師が必要に応じて日本語の表現に置き換えてあげるなど、柔軟な対応が求められます。また、自分にとって大切なものについても、大切なものは言えても、その理由を言うのは難しく、やはり、同様の対応が必要だろうと思われまます。

今回のような教室活動を行う際の教師の役割としては次のようなことが挙げられます。まず、取り上げるテーマについて、基礎的な情報をきちんと調べて整理しておくこと、次に、生徒の身の回りのことに関連させて、生徒の問題意識や興味を十分に引き出す工夫をすること、そして、プロジェクトを進める過程で、それぞれの活動に必要な言語材料を前もって適切に導入・練習させておくこと、さらに、活動が進んでいく過程で学習者が行う日本語によるコミュニケーションをしっかりとモニターし、フィードバックすることなどです。

山口敏幸

国際交流基金ソウル日本文化センター日本語専門家